

「おかまバー」⁽¹⁾における相互行為分析

根矢 三千代

0. はじめに

「おかまバー」という空間を考えると、そこに存在するものとしてまず思い浮かぶのは〈おかま〉であり、それに類似する名称の店を含め、店内に〈おかま〉が存在すればそこはおかまバーになると考えがちである。つまり、〈おかま〉と称する人々が存在すること⁽¹⁾で、「おかまバー」という空間構成に関して絶対的な位置をもつかのように考えられる。

私たちが他人の性別を判断する際、それを行う為に判断材料として用いるいくつかの事柄がある。それについて山崎敬一らは次のように言っている。

私たちの文化は、お互いに、自分が男であるかあるいは女であるかを外見的に表示するためのさまざまな道具立て（例えば、衣装、髪型、化粧、声の調子、しゃべり方等等）を備えている。私たちは、そうした道具立ての中で、その道具立てを用いて特に意識することなく、自分が男である、あるいは女であるということを、お互いに表示しあっている。（山崎 1994:94-5）

〈おかま〉という存在について言うならば、山崎らが例示している道具立てである、衣装や髪型、化粧、声の調子、しゃべり方等に関して、おそらく普段街角ですれ違ってもそれとは分からないほどに、いわゆる女性らしさを身につけている人は多い。実際私が調査を行った時にお目にかかった人たちは、私たちが日常生活で用いる尺度だけを使うならば、セックスが男性の人達だと気づかないであろうほどの、いい女ぶりであった。

しかし、「おかまバー」という空間において、私たちは確かに、彼女らを〈おかま〉として理解することができる。それは、「おかまバー」には〈おかま〉がいるということだけが、関係しているのであろうか。

「おかまバー」という空間であることを理解し、〈おかま〉という存在であることを理解するために一体そこで何が行われているのか、またそこでは何が楽しまれているのかということについて見ていくことによって、「おかまバーらしさ」とはどのようなところに見られるのかということをも明らかにしていき、その場がその場らしく作り上げられていく要素を解明していこうと思う。

アンソニー・ギデンスは、「われわれは、他者との日常の社会的相互行為の中で、(略)『ジェンダーを演じて』いる。」(Giddens 1992:129)としている。しかし、日常生活において求められているジェンダーの振る舞いの違いは気づきにくいものであると考えられる。その中で、社会学的観点やエスノメソドロジ的な視点の稚拙な私にとって、「おかまバー」という空間の中で演じているジェンダーは、本来セックスが男性である人々が女性の格好をしている状態の中で、セックスに求められる振る舞い方が見やすいのではないかという考えから「おかまバー」という空間を対象に選んだ。

また、今回の調査に当たっては、店内におけるビデオ撮影の許可をして下さり、撮影日

当日には、ビデオ撮影の許可をしてもらえようお客様に働きかけてくださった「おかまバー A」のママをはじめとする店員の方々には、心よりお礼を申し上げたい。さらに、データ収集の際に、研究の目的を理解して、ビデオ撮影に協力して下さった七名のお客様にも、重ねてお礼を申し上げたい。

1. 調査概要

四国内にある、「おかまバー A」に調査の協力をお願いしたところ、店内における撮影の許可をいただくことができた。さらに、撮影日当日お客として来ていたグループ（男性4名、女性3名）の方に、店内での様子を撮影させていただけるようお願い状をもってお願いしたところ、了解していただくことができた。そこで、平成11年10月19日に二台のカメラを用いてビデオ撮影を行った。

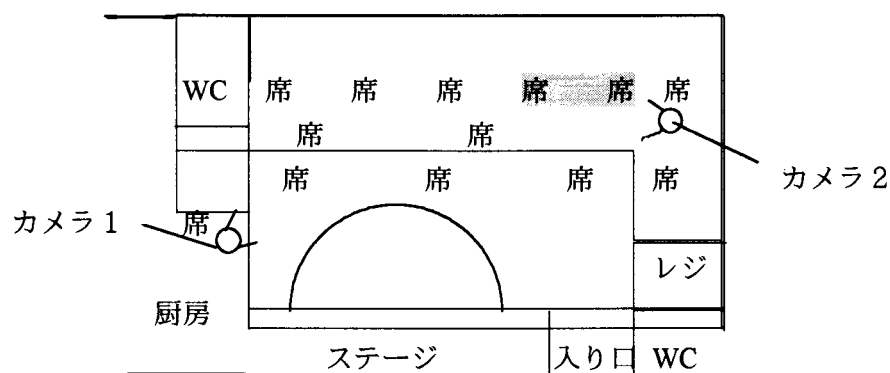
「おかまバー」という空間内における相互行為分析を試みる場合、その外見的・動作的特徴、およびそれに対する客の反応というものに対する分析が必要であると考えたため、会話だけでなく行為の記録を可能にするビデオ撮影によって、記録を行った。

その際、「おかまバー A」はショーパブであるため、撮影は著作権等の関係上、店側に指定された時間内においてのみ行ったため、およそ30分間となった。

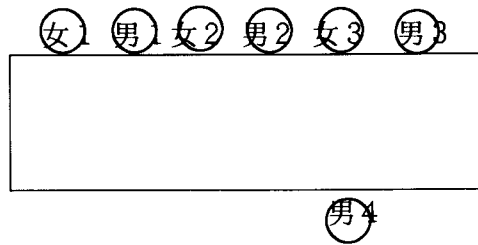
撮影日当日の「おかまバー A」における従業員構成は、ホストの方⁽²⁾が三名と調理場に調理師の方が一名となっていた。

撮影に先立って、9月の中旬にお店を訪ね、あらかじめ店員の方と顔合わせをし、撮影のお願いをすると共に、お話を伺った。

店内の簡単な間取り（図1）と、撮影を許可して下さったグループの方の席順⁽³⁾（図2）は以下の通りである。



店内の簡単な間取り（図1）



グループの席順 (図2)

2. 〈おかま〉であるということ

『エスノメソドロジー研究』の中で、H. ガーフィンケルは、アグネスというごく当たり前だが、非常に奇妙な一人の少女をとりあげた。彼女は、男として生まれ、男として育てられてきたが、外見的には女性であり当たり前の女性として社会の中で暮らしている。そのアグネスが、外見通りの身元をもった女性としてこの社会で生きる権利を獲得していく作業を、その著書の中で「通過作業 (パッシング)」と呼んだ (Garfinkel 1967)。それに対して、「おかまバー」の中で起こっていること、〈おかま〉と呼ばれる人たちが起こしていることは、外見とは違った身元をもった女性としてこの社会で生きる権利を獲得していくという意味において、このパッシングとは反対に位置するものではないだろうか。

「私たちは、自分の置かれた文化的道具立ての中で、その同じ道具立て (例えば、衣装とか髪型とか化粧等々) を用いて、相手を男であるとか女であるとか判断」(山崎 1994) しているため、その基盤が崩れ去った状態に直面したとき、混乱を起こしてしまうことがある。その意味において、パッシングとは非常に理にかなったものであろう。しかし、「おかまバー」において起きている、パッシングとは反対に位置するもの、つまり外見⁽⁴⁾とセックスの不一致をオープンにすることが、必ずしも混乱を呼ぶことにはならない。

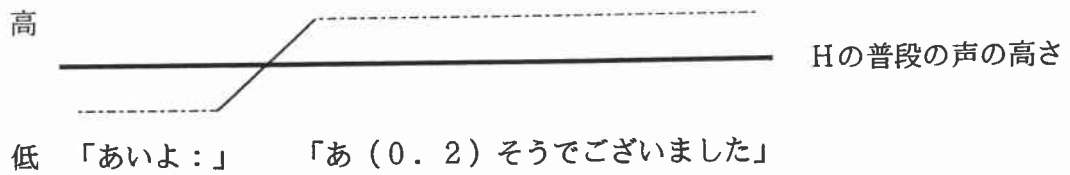
そこで、演じているという保障がなく、そして、その間の転換がおこなわれても、気づくのは非常に難しいものであるように思われる図と地⁽⁵⁾について注目し、〈おかま〉とはどのようなものかを、具体的な事例をもとに見ていくことにする。

〈事例1〉(9:00:23~9:00:38)⁽⁶⁾

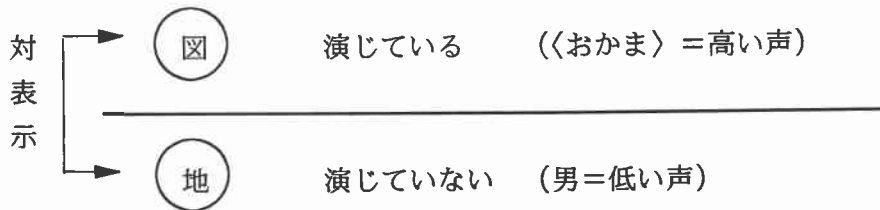
H : いや : : も : お待たせしました : : おいしくできあがりましたよ (.) あなた (0.

男1 :

男4 :



【Hの声の高さの変動(図3)】



【囧/地関係図(図4)】

しかし、もはや、普段から女性としての生活を送っているホストの人たちにとっては、どちらが地どちらが囧であるかということはほとんど意味を持たない。むしろ、地の存在が囧の存在を、また囧の存在が地の存在を包括することの方が重要である。

そして、地と囧の入れ替えの表面化によるテンションの高さの切り替えこそが、おかまバーを「おかまバー」らしく見せていくための具体的手段の一つなのではないだろうか。



乾杯をする男1とH(場面①) 1999.10.19 (9:00:30) カメラ2



乾杯をする男1とH（場面②）1999.10.19（9：00：33）カメラ2

3. 客による理解の表示

「おかまバー」に身を置く客にとって、〈おかま〉というものはどのようなものとして理解されているのだろうか。この章では、おかまが〈おかま〉として理解されている状態は、客のどのような表示によって示されていくのだろうかということについてみていこうと思う。

〈断片2〉9：05：16～9：05：22

H : お待たせしました (1. 2) // あららららら 急に女っぽ

【ビールグラスをとる】

男2 : (はい) (.) あはは // はは ← ①

H : くなっちゃってこまるわ :

男2 :



グラスをとる男2（場面③）1999.10.19（9：05：18）カメラ1

これは、追加注文されたビールをもってきたHがそのビールの受取手である男2の前に置くと、それを取ろうとした男2が、しなやかな手つきでコップを手取るという場面である。

ここでまず注目したいのは、男2の「(はい)」という発話とそれに伴う行動が、成り立っていることである。この行動が日常的なものではないことは、そのすぐ後の、男2自らの笑いからも伺える(①)。そしてHの「急に女っぽくなっちゃって困るわ」という発話は、男性の身なりをした人が女性的な仕草をすることは「困ること」と言っておちになりうることであり、日常的によく見られるものではなく、その場を盛り上げていることになる。

まねをするということは、まねをする対象について理解しているからこそできることである。しかし、これは、H自身を有意味化するものとしてのまねではないように思われる。と言うもの、Hはこのグループとの会話の中で、自分の出身地について語り、自分が〈おかま〉として働きだしたときのことなどを語っていた。このことから、Hとグループのメンバーが以前から知り合いであった可能性は少なく、H自身の慣行的動作をまねするための資料は彼らにはないと考えられる。また、ビデオテープに写っている範囲⁽⁸⁾での会話において、Hだけをマーキングできるほどのやり取りは見られなかった。

これらのことを踏まえた上で考えると、男2がまねをしているのはH個人ではなく、〈おかま〉そのものであるHをまねしていると考えられる。

そのため、この男2のビールを取るときに行動的特徴は、男2がH自身ををどのような

..... 左後 ,... 男1男1男1男1男1男1男1男1男1男1男1男1男1男1男1男1男1
H : (0. 6) やめてよ (1. 2) 船には女は乗れないで//しよ

①

男2男2男2男2男2男2男2男2, . HHHHHHHHH, . 男4, . H, . 男4男4
男1 : // おかまがはちまきして昆

②

1男1男1, . . . 右右右右右, . 男1男1男1男1男1, . 右右右右右, . 男1
H : // いやん (0. 6) それもええな (0. 6) ひゃhhhh//ま:

③

男4男4男4男4男4男4, . 男2男2男2男2男2男2男2男2男2男2, . H
男1 : 布とるとかい//う () // なあ

男1男1男1男1男1, . . . テーブル, . . . 女2女2女2女2女2女2女2女2, . .
H : よけいふやけちゃうじゃないの (0. 4) ふふふふふ (0. 4) ほんとにね (0.

HHHHHHHHHH, . 右前, . . . 女1, . 右前右前右前右前右前右前右前右前, .
男1 :

.. 男4男4男4男4男4男4男4男4男4男4男4, . ビールビールビール, . テーブ
H : 2) やめてくださいねえ (.) あなた (1. 0) 笑顔が素敵だわ (0. 4) おビ

.. HHH, . 右前, . . . ビ
男1 :

ルテールール
H : お持ちしちゃう

ールビールビール
男1 :

これは、出身地から遠く離れた場所で働いているHに対して、男1が出身地近くで働こうという気はなかったのかという問を發し、その問に対して、男1の言った土地ではおかまバーがなく働くことはできないとHが答えている。その答えに対し、男1はおかまバーがなくても、昆布取りなどはその土地でできたのではないかということを言っている。しかし、それに対してHは「(昆布をとるための) 船には女は乗れないでしよ」という発話で対応している。

視線から、男1の②の直前のHの発話①は聞き取れていなかった可能性もあるが、ここで問題にしているのは、男1の中では、Hは〈おかま〉でしかあり得ていないということである。

①と②のそれぞれの発話から、Hと男1の間には〈おかま〉というものに対して理解の差があることが分かる。Hと男1の対話から、Hは自分のことを女であると理解し、男1はHのことをおかまであると理解していることが分かる。しかし二人の間に理解の差があるにもかかわらず、この対話は対立したものとならない。それはなぜなのだろうか。

まず、具体的な双方の理解の差を西阪がまとめている「カテゴリーに結びついた活動(カテゴリー・バウンデッド・アクティビティ)」によって見ていく。

それぞれのカテゴリー(の担い手)は、とりわけ同じ集合の他のカテゴリー(の担い手)にたいし特定のかかわり方をすることが、一般的に、もしくは規範的に期待されている。(西阪 1997:82)

これによると、今、男1とHの間で話題に上っている「船に乗る」という活動は、「女」は「(昆布をとるための)船に乗ることができない」と期待されている。そこで、Hが、「船に女(この場合はHのこと)は乗れないでしょ」と発話することで自分、つまり〈おかま〉を「より女に近いもの」としてカテゴリー化していることが分かる。それに対して男1は、〈おかま〉は女の格好をしているが完全な女ではないために、「男ではない」が「船に乗ることができる」存在、つまり〈おかま〉を「おかま」カテゴリーに属しているものと考えたのである。そこで、自分が所属していたカテゴリー集合を[男-女]に位置していたHは、男1の明示した[男-おかま-女]というカテゴリー集合に理解を変化させることで、修正を行ったのではないだろうか。

しかし、Hの理解の修正がこうもスムーズにいったのはどうしてだろうか。それは、[お客/ホスト]という関係が[受け入れられる側/受け入れる側]という関係であり、Hの後に男1の発話があるということに起因しているのではないだろうか。つまり、たとえ先に発話を行ったHが自分を女であると位置づけていても、お客である男1がHを〈おかま〉であると位置付けたならば、Hはそれを受け入れなければならないことになるのである。そのことはこれに続く③の「それもええな」という発話によって、Hが先ほどの男1の発話を支持する発話をとっていることから分かるのではないだろうか。

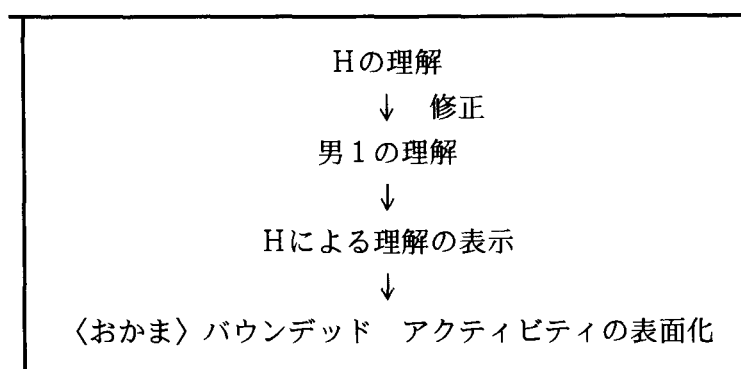
つまり、①と②において起こった理解の修正をするためにH自身が〈おかま〉の固定化されていないセックスというものを利用し、男1の理解に歩み寄り、理解の差の修正をスムーズに行っているのである。

さらに、ここにおけるHの男1を支持すると考えられる「それもええな」という発話は、今まで話していた声の高さとは違って変わり、低い声を出して対応している。このことから、〈おかま〉の声は低いものとして、表示されるべきものであると考えられていることが分かり、「おかま」は「低い声を出すことができる」というカテゴリー・バウンデッド・アクティビティを表面化させることになる。さらに、このことは、Hが男1の発話を受けて低い声を発していることから、Hの存在そのものが〈おかま〉であるということを表しているのではなく、セックスが男性でありながら女性の格好をしたものこそが〈おかま〉

であるということを表示していることになろう。

一方、Hが「それもええな」という発話をしている最中、当然その発話の中心的な受け手になるはずである男1は男2に話しかけたままで、Hに対して注意を向けていない。このことから、理解の差の存在に気づいていたのはHだけの可能性も考えられる。

しかし、この章において最も言いたかったことは、〈おかま〉の両義性を用いることによって理解の差の修正が行われるとともに、〈おかま〉であり続けるということは〈おかま〉というものに対するHの理解が男1の理解へと修正され、Hがその理解を表示することで〈おかま〉バウンデッド アクティビティの表面化が、相互行為的に達成されるということである。(図5参照)



〈おかま〉バウンデッド アクティビティの表示までの過程 (図5)

5. 「おかまバー」を楽しむということ

料理やお酒、会話を楽しむためなら、居酒屋やレストランあるいはクラブやバーといった場所を選択できる客が、敢えておかまバーという空間を選ぶのは、そこに何らかの楽しさが存在するからであり、その楽しさは「おかまバー」特有のものであるはずである。その場で一体何が楽しまっているのだろうかということを見ていく。そのことによりおかまバーらしさというものの具体的な特徴が見えてくるのではないだろうか。

5-1. 対応モードの変化

おかまバーであろうが、クラブであろうがそこでは接客が行われている。実際に、「おかまバー」で行われている接客の様子を見ていくことによって、何をもって接客というものが達成され、そして何をもってそこに楽しさを感じることができるのかということを見ていこうと思う。

女2女2女2女2女2女2女2女2女2女
H : が奥様の教育ですわねえ＝

HHHHHHHHHHHHHHHHHHHH
男4 : うれしいんやわ ＝ いやいや

この断片は、北海道出身のHが、自分の心は「(北海道にあるような)大自然と一緒に」で「広い」ため、男4に対して「私の胸におぼれなっさい」という言葉をかけると、男4は「もうおぼれたいわ」という言葉で応答した。さらに同じような内容で話を続ける男4に対して、Hは次に女2に対して男4がHを褒めてくれるのはあくまで場の雰囲気からであって、本気で言っているわけではないという内容のことを言った後、続いて、男4がそのように場の雰囲気を読んで話を盛り上げることができるのは、女4(奥様)の教育のおかげであるといっている。実際に男4と女2が夫婦であるかは不明だが、Hのこの発話は、むしろ男性客(男4)に対する、女性客(女2)というカテゴリーが対象になっているように思われる。

Hは、初め男4に対して、自分の外見的特徴を利用して、身体的に男性の性的欲望を喚起することのできる存在として①の発話で男4に話題を振っている。しかし、②では、〈おかま〉という存在は女性の気持ち分かる存在であるという社会的期待から女2に話を振ることによって、[男4-H]という関係枠から、[男4-H-女2]という関係枠に拡大し、親密さを防いでいる。さらに②の発話から、女2に対してH自身は女2と同じ舞台に立つことすらできない(おかまであること=男としてのH)存在であることをアピールしている。

つまりここでは、①と②はそれぞれ

- ①・・・男4に対する気遣い(男持ち上げモード)
- ②・・・女2に対する気遣い(Hはライバルではないモード)

というHの客に対する対応モードの違いを見て取ることができる。ところが、②のアピールがあることによって、Hは客に対して気を使わなければいけない存在であることを潜在的に理解していることが分かる。そして、そのことが結局、女2とHがすでに同じ舞台に立っていること、つまり、Hが女2のライバルとして成り立っていることの示唆になっている。ここでは、Hが女2に対して気を使えば使うほど、自分と相手の関係の同等化を示すことになるという結果になっている。そのことにより、②モードは、結果的に女2に対する気遣いモードとしては成立していない。

しかし、男性客が〈おかま〉の身体に惹かれたとしても、真剣にはなりにくいという、一般的な期待があるため、①においては逆に、「私の胸におぼれなっさい」といった身体的な話題を利用しやすくなるということが言える。そして、同じく②においては、この発話が女性によってなされていた場合、それは客とホストの間に直接的なライバル関係が生

まれることになるが、この発話が〈おかま〉のものであることによって女性客のおびえを呼ばないことになる。つまり、①から②への流れの中での対応モードの変化こそが“接客をしている状態”を表すことになり、次の話題に行くための切り替えの道具として〈おかま〉を利用しながらスムーズに接客がなされていることになる。

つまり、ここにおいて言えることは、「おかまバー」の中で受ける接客がおもしろいと感じるのは、〈おかま〉の存在を売りにしているからではなく、〈おかま〉という資源を上手に使うことで接客がスムーズに行われているからであり、場面展開が行われているからである。もちろん、その中では「おかまバー」ならではの利点も、大いに利用されているが、達成されているのはごく普通の接客である。その中において「おかまバー」で感じる楽しさは、〈おかま〉を見る楽しさではなく、〈おかま〉を資源として接客を成立させていることに対する楽しさであるといえる。

5-2. 「おかまバー」という空間

5-1では、〈おかま〉が存在することによって生じる資源による「おかまバー」の楽しさを見てきた。

次にこの節では、「おかまバー」という制度的状況の中での楽しみの具体的な例として、まねるという行為を見ていくことで、それがどうしてこの空間において楽しみとなるかについて見ていく。

ここでは、3での事例を再び用いて、男性の客が自分と同様のセックスであるホストの〈おかま〉としての行動をまねるところを見ていく。

〈断片2〉 9:05:16~9:05:22

H : お待たせしました (1. 2) // あららららら 急に女っほ

【ビールグラスをとる】

男2 : (はい) (.) あはは // はは ←①

H : くなっちゃってこまるわ :

男2 :

新社会学辞典によると、遊びというものは、外的な養成や実際的な目的から離れて、ただ楽しみのために、それ自体を求めて営まれる活動である。そして、遊びに熱中すると、我々は自己(内界)と対象(外界)とを隔てている境界を喪失して、対象自体のうちへ自己が融合してしまう経験をする。そして、遊びのおもしろさはこの解放=自由にあると言われる。文化を構成すべき基本的範疇である聖と俗とは区別される独自の特徴を持つ領域

をなしている遊びは、カイヨワによって、競争・偶然・模擬・めまいの四つに分類された（森村・塩原・本間編 1993）。

この〈断片2〉における、男2の、ビールグラスをとるという行動は、〈おかま〉と言う対象と自分との間を隔てているジェンダーの違いという境界を喪失して、行った行為だと言える。さらに、これは、カイヨワのいう遊びの四分類の内の模擬にあたる可以考虑することができる。

第3章において、男2はH個人ではなく、おかまそのものであるHをまねしているのだということを述べたが、「おかまバー」という空間において、〈おかま〉の存在や、仕草、行動は日常ほど特別視されることが少ないように思われる。しかし、この場面において男2の模倣が、男2だけの遊びの範囲を超えて、ここに参与する会員たち全ての遊びの対象となっているのはなぜだろうか。

それは、男2が〈おかま〉の行動を真似ることによって、今まで自明視されていた〈おかま〉の行動の日常からの不透明さが、観察可能なものとして現れてきたからではないだろうか。

このことは、男2がこの場面において、〈おかま〉を模倣することが、じつは、男2がまねをする対象であるHの行動は、男2と同じセックスを持った者の行動であるというすでに備わっている成員の共通理解が、男2がまねをすることで、表面化されることになり、Hも男であるということが明白になっているからではないだろうか。

さらに、男2の〈おかま〉をまねするという行動が、有意味なものとなってくるのは、やはり、「おかまバー」という空間であるからではないだろうか。もちろん、男2の行動が日常生活の中において行われたとしても、遊びの基本として十分機能し得るには違いない。しかし、それぞれの模倣がそれぞれにとって最も適した場で行われたとき、それは予想以上の力を発揮することになるのではないだろうか。

また、男2が真似るということを突然行った場合でも、それが、少しのトラブルもなく有意味化されたということから、「おかまバー」という空間であるからこそ、男2もまねるとい遊びを楽しむことが行いやすかったのではないだろうか。

6. まとめ

「おかまバー」とは、体験したことのない者にとっては、未知の世界でありそこで何が起きているのかは想像することのできない、非日常的な世界が広がっているような気がする。しかし、実際にそこで起きていることは、私たちが日常で行っていることと何ら変わりのない、空間を楽しむということであり、楽しむための要素としてお客とホストがいる。おかまがいるから「おかまバー」であり、対象をおかまに求めているお客がいるから「おかまバー」なのではない。実際に、セックス、ジェンダーともに女性である人たちとともに働いている〈おかま〉の人たちもいる。しかし、その空間がおかまバーであるかという、必ずしもそうばかりではない。

つまり、そこが「おかまバー」という店であり、「おかまバー」らしさということが観察可能であるということは、そこには確かに、〈おかま〉を当たり前なものとして扱う特別な秩序があるということが言える。それは、第二章で見てきた、地と図の対関係の切り替えの早さであり、そのことによって生まれるテンションの高さである。さらに続く三章

で見てきたそれを理解する客の表示という対応による、相互行為の達成がそこにあるのである。さらに、それらの構成員たちによって、その空間を非日常的空間に仕立てているのであって、その空間があるからといって、はじめからそこが非日常的空間になるわけではないのだ。

「おかまバー」という調査対象を選ぶことによって、社会学的観点から見た場合、それは興味本位なきわもの的なものだといわれるかもしれない。しかし、この論文に関しては、つたないながらも、常に相互行為分析の視点から分析し記述していくことを心がけたことを報告しておきたい。

注

- (0) 「おかまバー」という名称については、広く一般的ではないかもしれないが、店内において〈おかま〉をゲイと称することがほとんどなく、客と店員との会話の中に実際「おかまバー」ということばが使われていたことと、このことばでも内容を損なうことはないと考えたため用いることにした。
- (1) 本論文に関しては、〈おかま〉という存在の定式化を目指すものではないため、〈おかま〉と称する人たちのセックスやジェンダーの確立はここでは行わないものとする。そこで、論文中の〈おかま〉という表現が指す対象は、それを職業としている人とする。
- (2) ここで使うホストという単語に関しては、〈おかま〉を男性として扱っているための単語としてではなく、厨房で料理を作るという仕事をしている従業員（調理師）と接客および給仕人としての従業員を区別するための名称として用いている。
- (3) ここでお客側の性別を示したのは、この後の分析部分で性別が必要な部分があるためである。さらに、このグループにおいては男女が交互の席順で座っているが、それは店員側の指示ではなく、また、そのような席順で座ることが決まっているわけでもない。
- (4) ここでは、職業としてのおかまを含むため、その意味においてジェンダーとは違ったものである。
- (5) 我々の見る世界は一様で均質な世界ではなく、あるものはその世界の中で全景となって我々の眼前に浮かび上がって見え、他のものは背景となって後方に広がっているように見える。主題を構成し、まとまりを持つ前者を図といい、後者を地という。部分はその全体から解離できないことを指摘したこの現象は、デンマークの心理学者ルビンによって最初に記述された。社会学的にみれば、個人の行為は図であり、文化は社会的な地と考えることができる。（森岡編 1993:813）
- (6) データトランスクリプトの一行目は撮影時間を表している。カメラ二台を用いて撮影を行ったが、その際二台のカメラの間に約20秒の時間差が出てしまった。今回はカメラ2に準じて時間表示を行った。また、この論文におけるトランスクリプトで用いられる記号を以下に示しておく。

〈会話・行動に関する記号〉

// 複数行の同じ列に置かれた二重スラッシュ：参加者たちのことばの重なりが始まる箇所を示す。

- = ことばとことばの間、もしくは行末と行頭に置かれた等号：
とぎれなくことばがつながっていることを示す。
- () 丸括弧：何かことばが発せられているが、聞き取り不可能であることを表す。また聞き取りが確定できない場合は、当該文字列が丸括弧で括られる。
- (数字) 丸括弧で括られた数字：その数字の秒数だけ沈黙のあることを示す。また、ごく短い間合いは「(.)」という記号で示される。
- : : コロンの列：直前の音がのばされていることを示す。
- ? 疑問符：語尾の音があがっていることを示す。
- NNN 各発話の上に置かれた同一文字の列：その文字 (N) で示された特定の事物もしくは人物に視線もしくは顔が向けられていることを示す。
- ... ピリオドの列：動作が始まりかけていることを示す。
- ,,, カンマの列：動作がおわりかけていることを示す。
- hhh hの列：呼気音を示す。

〈参与者・事物に関する記号〉

H ホスト

男N 図2に対応してN番目の男性客

女N 図2に対応してN番目の女性客

胸 Hの胸

中 中空を見ている

下 下を向いている

右/左 右手/左手方向を見ている (その他の方向を表す文字の時もこれに同じ)

(7) この地方の方言であり、「男と女でしょ」というような意味。

(8) グループが入ってきてから、交渉後すぐから撮影を始めた。

〈参考文献〉

Coulter, Jeff, 1979, *The Social Construction of Mind: studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, London: Macmillan. (=1998、西坂 仰訳『心の社会的構成ーヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの視点』新曜社。)

Francis, David and Christopher Hart, 1997, "Narrative Intelligibility and Membership Categorization in a Television Commercial," Stephen Hester and Peter Eglin eds., *Culture in action: studies in membership categorization analysis*, United States of America: University Press of America, 123-151.

Garfinkel, Harold, 1967, "Passing and the managed achievement of sex status in an "intersexed" person part 1" an abridged version in H. Garfinkel, *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall (= 1987、山田 富秋・好井 裕明・山崎 敬一訳「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたかーある両性的人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」『エスノメソドロロジーー社会学的思考の解体』せりか書房、215-295。)

Giddens, Anthony, 1989, *SOCIOLOGY*, Cambridge: Polity Press (= 1998、松尾 精文・西岡 八

- 郎・藤井 達也・小幡 正敏・叶堂 隆三・立松 隆介・松川 昭子・内田 健訳
『社会学』而立書房。
- 井上 俊・上野 千鶴子・大澤 真幸・見田 宗介・吉見 俊哉編、1995、『岩波講座
現代社会学 10 セクシュアリティの社会学』岩波書店。
- 井上 俊・上野 千鶴子・大澤 真幸・見田 宗介・吉見 俊哉編、1995、『岩波講座
現代社会学 11 ジェンダーの社会学』岩波書店。
- 榎田 美雄編、1999、『エスノメソドロジーと福祉・医療・性—平成10年度徳島大学総
合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集—』。
- 皆川 満寿美、1993、「『無関与』の協同的達成」『現代社会理論研究』3:47-67。
- 森岡 清美・塩原 勉・本間 康平編、1993、『新社会学辞典』有斐閣。
- 猫目 ユウ、1998、『ニューハーフという生き方』ごま書房。
- 西阪 仰、1992、「参与フレームの身体的組織化」『社会学評論』169:58-67。
- 西阪 仰、1996、「エスノメソドロジーという技法」栗田 宣義編『メソッド／社会
学』川島書店、61-77。
- 西阪 仰、1997、『相互行為分析という視点』金子書房。
- 宮台 真司・速水 由紀子・山本 直英・宮 淑子・藤井 誠二・平野 広朗・金住 典
子・平野 裕二、1998、『〈性の自己決定〉原論』紀伊國屋書店。
- 大越 愛子、1997、『近代日本のジェンダー』三一書房。
- 虎井 まさ衛・宇佐美 恵子、1997、『ある性転換者の記録』青弓社。
- 上野 直樹、1998、「見ることのデザイン—知覚の社会—道具的組織化—」山田 富秋・
好井 裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房、252-269。
- 山崎 敬一、1994、「補論 男と女—ことばという道具立て—」山崎 敬一・山崎 晶子
『美貌の陥穽』ハーベスト社。
- 山崎 敬一・西阪 仰編、1997、『語る身体・見る身体』ハーベスト社。
- 山崎 敬一・山崎 晶子、1996、「差別のエスノメソドロジー—場面の組織化とカテゴリ
ーの組織化—」井上 俊・上野 千鶴子・大澤 真幸・見田 宗介・吉見 俊哉 編
『岩波講座 現代社会学 15 差別と共生の社会学』岩波書店、55-74。
- 山田 富秋、1995、「会話分析の方法」井上 俊・上野 千鶴子・大澤 真幸・見田 宗
介・吉見 俊哉編『岩波講座 現代社会学 第3巻 差別と共生の社会学』岩波書店、
55-74。
- 山田 富秋、1999、「会話分析を始めよう」好井 裕明・山田 富秋・西阪 仰編『会話
分析への招待』世界思想社、1-35。
- 好井 裕明、1997、「からかわれ、さらされる『身体』と『論理』—あるディスコース空
間にしくまれ、つくられる性差別現象の解説」『現代思想』:40-56。
- 好井 裕明、1999a、「制度的状況の会話分析」好井 裕明・山田 富秋・西阪 仰編『会
話分析への招待』世界思想社、36-70。
- 好井 裕明、1999b、『批判的エスノメソドロジーの語り—差別の日常を読み解く—』寝曜
社。